



城

第六十五回

高天神城

～武田勝頼の武勇と凋落の象徴～

山本 忠博

今回は静岡県掛川市の高天神城をご紹介します。この城は、もともとは東海地方の戦国大名だった今川氏の城でした。しかし、今川氏の衰退後に甲斐（現山梨県）の武田氏と三河（現愛知県東部）の徳川氏の争奪の対象となりました。堅城のこの城を落としたことで、武田勝頼の武名は大いに上がりましたが、逆にこの城を失陥したことで、彼の凋落は決定的となりました。武田家滅亡のカウントダウンは、この城の落城から始まったと見て良いでしょう。

今川氏から徳川氏へ

高天神城の存在が確実な資料で確認できるのは、今川氏の支配下に置かれてからです。

そして、今川義元の代にこの城の城代になったのは小笠原氏でした。この小笠原氏は、第六十三回の小倉城で登場した、流浪の小笠原氏の同族です。武田信玄によって信濃（現長野県）から追い出された信濃守護の小笠原氏の当主から見ると、一つ前の代のときに守護家から別れたのが、高天神城の小笠原氏です。

さて、皆さんご存知のとおり、義元は1560年の桶狭間の戦いで討ち死にしまいました。後を継いだ息子に家中の混乱を収める力はなく、配下の徳川家康には独立され、同盟者の武田信玄からは同盟を破棄されました。そして、家康は今川領の遠江（現静岡県西部）に、信玄は駿河（現静岡県中部）に侵攻しました。この際に、遠江の高天神城の小笠原氏は、家康の配下に入りました。1568年のことです。

東海地方の西側の遠江までを家康が領し、東側の駿河を信玄が領することになり、その境界線の近くの高天神城は、家康側の防衛上の最重要拠点となりました。

ちなみに、高天神城の小笠原氏は、織田・徳川連合と浅井・朝倉連合との間で行われた姉川の戦い（1570年）で、旗下から“姉川の七本槍”を出すほ

どに、徳川配下でけっこう活躍しております。

信玄の襲来？

武田信玄がその晩年に西上作戦を開始したのは1572年のことです。この作戦の主目的が信長討伐のうえでの上洛にあったのか、或いは織田・徳川領の局地的な攻略にあったのかは議論のあるところですが、信玄の当面の攻撃対象が遠江と三河であったことは確かです。実はこの前年に、西上作戦の前哨戦として、信玄が高天神城を2万5千の兵で囲んだと言われています。その際は、城の堅固さを見て取って、すぐに囲みを解いたと言われています。が、研究が進んで、今では信玄による高天神城の包囲はなかったのでは？（後年の勝頼の軍事行動と混同しているのでは？）、とも言われています。上記の西上作戦においても高天神城は徳川の遠江における重要拠点として機能し続けていましたので、少なくとも信玄の代に高天神城が武田の手に渡ることはありませんでした。

第一次高天神城の戦い —勝頼の襲来—

信玄は西上作戦の途上で持病が悪化して病没してしまいました（1573年）。その後を継いだのが勝頼でした。信玄の死によって織田・徳川連合が反攻に出てきたのに対して、勝頼もまた積極的な攻勢に出ました。

勝頼が、遠江侵攻の要となる高天神城の奪取に動いたのは1574年の5月のことでした。総勢2万5千でした。対する徳川勢は全兵力でも1万ほどで、武田勢の他方面からの攻撃も予想されたために高天神城に対抗できるだけの兵力を向けられる状態にありませんでした。困った家康は信長に助けを求めましたが、信長の動きは緩慢で、援軍をなかなか送ってくれませんでした。信長としても他に敵を抱えていて、兵を割くだけの余力がなかったようです。

高天神城の小笠原氏は、1,000程の寡兵で良く戦い、6月の半ばになってもなんとか持ち堪えていました。その間に家康へ再三にわたって援軍の要請を出していましたが、家康からの援軍の気配はなく、防衛陣地は次々と落とされて主郭を残すのみとなりました。ここに到って小笠原氏は家康を見限り、城兵の助命を条件に勝頼に降伏することになりました。

降伏を受け入れた勝頼は、誰一人として処分することなく、自分の配下に入ることを望む者は受け入れ、徳川に忠誠を誓う者はそのまま解放しました。そして、城主の小笠原氏とその大半の配下（前述の姉川の七本槍の内6名を含む）は、徳川を見限って武田に属することになりました。ただし、この後に領地替えが行われており、小笠原氏は高天神城を離れることとなります。

この戦いにおいて徳川家康と織田信長は何もできなかったため、大いにその評判を落としました。対して武田勝頼は、堅城を落としたこととその後寛大な処置によって大いにその評判を上げました。勝頼は後に武田家を滅ぼすことになるので、後世において何かと評判の悪い人ですが、この時点においては、ちまたで「父の信玄よりも戦上手だ」と噂されたと言います。

ちなみに降伏した小笠原氏の当主は、ほどなくして病死したとか、降伏のことを根に持つ家康に16年後に捕らえられて処刑されたとか、様々に伝えられています。

第二次高天神城の戦い —勝頼の凋落—

織田・徳川連合に対して積極策に出て、信長や家康から「油断できないやつ」と思われ始めていた勝頼が大ゴケしたのは、1575年のことでした。皆さんご存知の長篠^{ながしの}の戦いです。とはいえ、勝頼はこの戦いの後に家中の立て直しを行っており、まだまだお家滅亡に直結する事態には陥っていませんでした。それでも狂った歯車を修正することは難しいもので、その後の勝頼の判断が裏目に出たこともあって（ただ、意外にもこの時に武田家の最大版図を築いている）、勝頼は領国の両側面から挟撃を受ける事態に陥ってしまいました。

勝頼が外交でなんとか事態を打開しようとしているときに、徳川家康が動きました。周到に準備を進めて、例えば複数の砦で囲って補給線を断って、高

天神城の奪還戦を開始したのです。1580年のことです。

家康は5,000の兵で城を囲んで兵糧攻めにしました。城方からは勝頼に救援要請を出しましたが（逆に「援軍を送らないように」との書状もある）、勝頼は、周囲の勢力情勢や外交上の問題で援軍を送ることができませんでした。城兵は援軍が来ない絶望的な状況で、攻城側の降伏拒否の姿勢もあって、半年にわたって城に籠もり、多くが餓死し、最後は城外に討って出て玉砕したと伝わっています。

このときの織田・徳川連合側の処置は勝頼が行ったそれとは真逆で、名のある者はことごとく処刑されました。連合側の思惑としては、勝頼の無力さとそれからくる悲惨な結末をアピールしたかったようです。そして、この思惑に乗った勝頼の配下には動揺が走り、この時から一気に離反者が増えていくこととなります。武田家は、あとはもう滅亡までの坂道を転げ落ちるだけの状態になり、勝頼は1582年に家臣に裏切られた状況で自害することになりました。

高天神城のその後

落城後の高天神城には戦略的な価値がなくなり、廃城となりました。

現在ではハイキングコースが掛川市によって管理されています。もともと比高差が100 m程度の山なので、比較的容易に散策が可能です。戦国時代の東日本の城らしい土塁の形跡が今も見られます。現地におもむいて、武田と徳川の争奪の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



高天神城跡遠景